



No.10
2016年2月22日
発行
静岡市
平和委員会
静岡市葵区鷹匠
1-5-8
TEL 253-1854
FAX 252-0785
メール
Peace-City
@mail.707.to

静岡市平和委員会 定期総会の報告

1月23日シブウエルにて2016年度総会が開かれました。出席23名 委任状 62名
冒頭、木野会長の文書報告をもとに戦争法を取り巻く情勢の特徴について討論、そして二年間の活動総括、今年度の活動方針について熱心な討論が行われました。(県平和委発行平和新聞に詳報)

①憲法を守り生かす闘い―戦

総会で確認された 今年の運動方針の柱

①憲法を守り生かす闘い―戦

争法を廃止し、立憲主義を取りもどす闘いを中心に進める。

全市民の統一した闘いを追求しながら「戦争法廃止、オール静岡アクション」の行動に積極的に参加する。2000万署名の先頭に立つ。会員は50筆集めよう！②辺野古に新基地を作らせない粘り強い闘いを進める沖縄県民との連帯し、東富士での米軍の訓練監視、撤退を求める闘いを進める。

③核兵器廃絶を自指す活動、浜岡原発再稼働は許さない闘い。

④歴史の歪曲を許さず、戦史や戦争体験の掘り起こしなど後世に伝える活動を行う。

そのために、「みんなが進める活動」として、時々的情勢に見合った学習会、平和ツアーや沖縄交流など楽しい活動の開催を重視する。機関紙「平和の風」を充実して、会員の交流も強めてゆく。そして平和委員会を大きくしてゆこうというものです。

今年度の役員は引き続き、会長・木野忠、副会長・合戸政治、事務局長・三輪矩正、顧問に加藤昌、小林三郎の諸氏です。

運営する理事会は小澤徳和子、海野順二、木野忠、榛葉悦郎、新村直樹、鈴木節子、鈴木文也、鈴木正、丹羽巖、西部勝子、船守孝行、三輪矩正、望月金一、渡辺正寿の皆さんです。よろしくお願います。

今年各地域、各分野、各組織で一斉に署名活動が進められています。どの署名も全国共通の統一署名です。どんどん広げましょう！

平和委員会の会員は、自分が集めた数を電話&フアックスで、事務所まで正確に報告してください。

風力発電能力が原子力発電能力を上回る！

―合戸 政治―



昨年末の朝日新聞の報道によると、2015年度における世界の風力発電能力が、4億kWを超え原子力発電のそれを上回る見通しだという。ただし、風力発電の稼働率は30%。80%の原発と較べると、実際の発電量は約3分の1程度だが、世界風力エネルギー協会の見通しでは、2030年には20億kWを超え、原子力発電の発電量も追い抜く可能性があるという。市場の拡大と技術革新によって風力の発電コストは下がってきている。

国別で今年最も風力発電施設を増やしたのは中国で、1932万kW。次いで米国594万kW、ドイツ385万kW、インド314万kWの順となっている。日本の増加は6.4万kW。

この世界との差に愕然とする。3・11以後自然再生エネルギー政策に力を入れたかに見えた日本だが、太陽光発電など頭打ち。日本の再生可能エネルギーが増えないのは、原発再稼働政策に固執し、政策的な対応をしていないことが原因だろう。

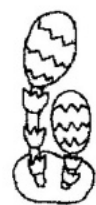
前置きは以上にして本題はこれから。今、東日本大震災の被災地で、あの未曾有の災害の記録として「言い伝え」も大切だが、「形」として被害のすさまじさを遺すという意見と、親兄弟や愛しい我が子たちの死を思つて、津波で残った壊れかけた元の役所や小学校の無残な姿をいつまでも見るのは辛い、一刻も早く撤去を希望する遺族の思いが交錯し、地域ではどうするか悩み思案中のこと。災害直後しばらく大型船が街だった所に打ち上げられていたが、これだけは何とかして遺せないものかと思つたが結局撤去されてしまった。モニメントとしては存在感十分で良いと思つたが残念だった。

大きな事件があきても、やがて人々は散り散りになり、人間は年をとり、記憶もいつかは灰となってしまふ。やはりリアルな「形」で遺すのがベストではないか、皆さんの如何お考えでしょうか。

榛葉 悦郎



日本人は物事を忘れ易いと言われてきた。過日、安倍首相が「餅を食べたら忘れてしまつ」と言ったとか。「忘れてはイケナイコトを忘れないようにするにはどうしたらよいのだろうか。日本と同様、先の大戦で敗けたドイツはナチスの非人道的暴行を自国民に「形」として「歴史遺産」として残し、教材としても使つて遺してきている。ポーランドを旅した時、アウシュビッツを訪れ強制収容所や死体焼却場、毛髪や靴、眼鏡、靴が山のように積まれた遺品の数々。集団トイレ、高圧電流の通じるバラの柵、銃殺場、絞首台等々、何とぞぞましい！しかし、その後には死を待つ多くの人の姿が容易に浮かび上がる。人類にとって後の世代に遺すべき、決して忘れてはならない、繰返してはならない記憶すべきものとして、並々ならぬ強い意志による結果だと思つた。





15歳の少年の心象の戦争

鈴木 光治 (すずき みつはる) 著

学生、戦時下の強制労働

私の学徒勤労働員日記

本の泉社・刊

著者略歴

1930年、東京都で生まれ、静岡県で育つ。
 2007年、千葉県流山市に移住。
 浜松師範学校卒、通信教育で慶応義塾
 大学文学部と中央大学法学部卒

職歴 小学校 東京都足立区伊興小学校
 中学校 東京都足立区江南小学校
 静岡県榛原郡五和中学校
 高校 静岡県清水西・掛川工業・
 焼津中央・島田商業
 大学 愛知県日本福祉大学

二月十七日 空襲と宣伝

「昨日は午後から空襲を受けたが、昨日は朝っぱらから警戒警報だった。あれは我先にと紙片を拾いに行きた。工場内でも降りて来たからである。村上方一枚拾ったの息を吐き出す。板垣退助のことが聞いたらこのない人物の顔。「板垣死すとも自由は死せず」と書いてあった。変な言葉だけ、いやいやと調子がよいので覚えてしまった。「自由は死せず」とか「自由は死せず」とか、いやいやと調子がよいので覚えてしまった。

五月二十五日 戦争は恋も許さぬ

大事件である。野上の奴が恋愛をしてそのことが理由で退学になるらしい。相手は動員に来ている高等女学校の生徒だ。工場めぐりをした時からの付き合いだ。さういふみる彼女たちの優しい姿はあれはみんなの唯一のあがれだったと言えぬ。だから野上の奴の気持ちもよく分かる。あれだっけもう少し野上へいってやめ男で大胆だった。話のことも彼女たちから聞いて、これもかなわぬことなら手紙のやり取りくらいしたいと思つてゐる。

七月二十日 日用品の盗み広がる

世の中がひどく荒れてきた。僕がわい世の中になつてきた。ある主婦がマッチを「箱お勝手(台所)に置いて、配給の野菜を買に行つたわすか、三分の間にぬすまれてしまったという。あれはマッチなど不必要なものだからしつかりしてしたが、近頃は配給以外に入手できない貴重品になつてしまった。盗られた人は困つてゐるよ。

八月十五日 終戦を踊り上げて喜び

なんと嬉しいことだろう。戦争が終わった。おれはあまり喜びすぎて踊りあがって父にこめられてしまった。と、角、無性に嬉しかった。じつとあつたのであつたのである。だが父も母も深刻な顔をしてゐるので少々遠慮した。どうして悲しそつたんだろ。

おれはこの戦いで学校では学べぬことを学んだ。戦争は罪悪であること、国民をあきおいてゐる味方は敵以上にあつたこと、戦争でもつける人もゐること、戦争のなかで人間は墮落し動物の本性を現すことなど。そして他ならぬおれ自身も戦争の中で、いかに言欲々冷酷で非人間的であつたかを。

戦いは終わった。おれは生きてゐる。また若い。これから一杯に生きよう。

本の紹介

「大変な時代、『平和の風』が吹きまわるといふことを願つています。」著者からお励ましをいただきましました。鈴木さんは英語科(高校)のすぐれた実践をたびたび報告されておりました。

著者15歳うかがう(すずきみつはる)昭和20年一月から八月の敗戦までの記録です。「公然と勉強しなくともよい、なんと学徒勤労働員とはいもんだ」「国滅びて何の教育をやらぬ」と、当初は書いています。

戦局の進むなかで、「こんなことは口に出しては言えないがこの戦は負けいくやに違いない。おれたちは何のために働いてゐるのだろ。」

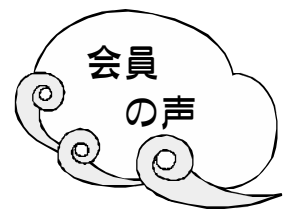
上の抜き書きにみられるように、革命といつていいような成長の記された貴重な記録です。事後、思い出しつてのものではなく、当時の残された記録です。工場教育の非人間化、おき出しにされた人間の卑劣さが記され、人間性をむしばんでいった戦争の実相がわかります。

鋭い目と完成はどのように培われたものか、読む者は気がなることです。「小学校から書く習慣があった。生活綴方教育の影響を受けた先生がいて、よく作文を課題に出されたのです」と、答えられています。

この目、カ、その日本国憲法を

守りぬいてきた底力であり、この記録を読むことで、その力を継ぐことが私たちの課題ではないでしょうか。(鈴木 正)

「花には太陽を子どもには平和を」先輩たちの言葉です。私は、保育者として2000万署名に思いを託します。 松川 由美



◇14歳で満蒙開拓青少年義勇軍(池ヶ谷中隊)に参加。国境、黒龍江近くに入植。300余名の仲間も召集、転職で半減。1945年8月10日から棄民の14カ月に及ぶ逃避行。南へ南東へ、小興安嶺をひたすら歩く。米は一週間で尽き、ハシバミの実や途中でみつけた大豆を食べる。一日大豆10粒と決めて。だれにもくれなかったよ。それも尽きて馬を殺した。血まで食べた。◇以前、朝鮮人の弁当を見た。上は真っ黄色の粟ばかり。その下に白米。「米は主食だったが、関東軍が米をみなとてしまふ」と。「王道楽土」「五族協和」ってウソだとわかった。正真正銘それまで信じていたよ。14、15歳の子どもだし、学校で教えていたよ。◇画餅だった。征服者、権力者というのはウソをつく。アメリカの選挙だって、アベ政治だってそう。大ボラふいて、それでもまだだまされるのか。

高木 孝義 (88歳) 旧有度村草薙生まれ

ミサイル問題、目に余る過剰反応
 北朝鮮の発射したミサイルへの過剰な軍事対応は目に余る。PAC3を沖縄などに緊急配備して迎撃の構えを大仰に見せようとした。しかし、大気圏外を飛んでいくミサイルを撃ち落とすことなど不可能で、全く意味のない行動だといふのだ。軍事には軍事で対応するという示威行動、一種のパフォーマンスであり、国民への心理誘導作戦なのだと見抜くべきである。「戦争する国」反対の署名を！

榎本 仁

